

『イスラム思想研究』創刊によせて

柳橋 博之

Hiroyuki YANAGIHASHI

この度、東京大学文学部・大学院人文社会科学研究所イスラム学研究室紀要『イスラム思想研究』が創刊される運びとなった。元々イスラム学研究室は、1982年に、日本初のイスラム学に特化した学科として創設された。当時、中東への関心が高まっていたが、その目的はアラブよりは油だと揶揄されることもあり、イスラムという宗教をその根本教義、そしてそれを説く原典に立ち返って研究しようというのが、その創設の主旨であった。当時私は、東洋史学科の修士課程に入ったばかりで、イスラム学研究室の立ち上げにはいささかの労働力（物理的なものに限る）を提供した覚えがあるが、以来、イスラム学研究室の活動を最初は横目に、後には当事者として眺めてきた。そのような立場から本誌の意義や本誌に期待するところを綴ってみたい。

その創設の主旨から、イスラム学研究室では、とにかく、イスラム思想を中心とする古典を精読するというのを最も重要な目的の一つに掲げている。実際、初期の同研究室では中村廣治郎先生、最初期に助手の任に就かれていた鎌田繁先生、小田淑子先生を中心として、原典講読の会や原典講読に基づく研究会が活発に開催されていた。このようにイスラム学研究室では、イスラム学の古典を精読する伝統が連綿と続き、本誌の創刊にも至っている（ちなみに本誌の名称は、このような環境下で1984年に開始された「イスラム思想研究会」にちなんでいる）。このことは、この創刊号の掲載論文を見ても窺われるところであり、もう何十年前前からイスラム思想の研究者にとってはなじみ深い思想家の名前や彼らの著書の翻訳が並んでいる。

このような学問のあり方は、あるいは現在の時流にはいささかそぐわないものかもしれない。何か抽象的な理論を掲げてそれに従って古典を再解釈していくという方法の方が受けはよいのかもしれない。昔から翻訳は、正確を期すためにはかなり高度の知識と洞察力を要する割には高い評価を得にくい作業だとされている。その能力には定評のある研究者でも、自分の専門から多少とも外れたところでは不正確な翻訳をしている例は幾つも見つけたし、かくいう私もかつてとんでもない誤訳を指摘され、青くなったり赤くなったりしたことがある。原典を正確に読むという作業は、探査機を惑星に送り込むのに似ているかもしれない。惑星の表面はでこぼこしていて、地形を正確に把握することはむずかしい。しかも、10センチも着陸場所を間違えると探査機がひっくり返ってしまうかもしれない。探査機を無事着陸させても、探査（読解）という作業そのものが対象を少しずつ変えていくことも避けられない。このあたりは、「道の霜、一足ずつに消えて行く」といった感覚であろうか。

もちろん、原典を正確に読み、正確なデータを取れというのはあらゆる学問の基礎中の基礎であって、殊更に強調する必要もないのかもしれない。しかし、創設から 37 年を経て、イスラム学研究室の研究の姿勢が一つの明確な形をとって結実したという意味において、本誌は重要な意義を有すると考える。話が翻訳に集中してしまったが、正確な解釈に基づいてイスラムの教義を知るという目的を果たすことに本誌が寄与することを切に願っている。

(東京大学大学院人文社会系研究科・教授／Professor, Graduate School of Humanities and
Sociology, the University of Tokyo)